

# 図書館だより

北海学園大学附属図書館報 第28巻3号(通巻179号) 2006.10.25

vol.28

NO. 3

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

美馬孝人

## 2 労働者の組織化の研究

浜 忠雄

## 3 蔵書の始末

平田洋子

## 4 耳による読書

韓 永學

## 5 図書館利用は大学生活の一部

## 6 この視聴覚資料がすごい!

視聴覚資料貸出ランキング

青木千加子

## 8 24時間オープン図書館!?

図書館からのお知らせ

編集後記

# 労働者の 組織化の研究

文＝美馬孝人

(みま たかと／経済学部教授)

古典的な著作である『労働組合運動の歴史』を書いたウエップ夫妻は、労働組合関係の資料を古い時代のものから幅広く集め、1871年の労働組合法の成立運動にかかわった人々にも面接して、臨場感豊かに労働組合活動の合法化と政治への参加、全体として労働階級の政治的社会的影響力の増大を描いた。

ウエップ夫妻が膨大な資料を前にして、その整理のしかたに苦慮していた時、一つの指針として大いに参考にしたのが、ルヨ・ブレンターノが先に出版していた研究書『現代労働組合論』であった。ブレンターノは、新歴史学派として先験的な理論による労働者の組織化に不信を抱いていたが、イギリスの労働組合運動を「歴史上の諸関係から全く有機的に発展した」ものとして「総ての教説よりも長く生き続ける保証をあたえる」と評価していた。

ブレンターノは、中世的なギルドによる職人の職業上の安定が失われたところに、労働組合的な団結が生ずるとの仮説を立てており、それをイギリスの歴史の中に実証しようと苦闘していた。彼は単一の組合の長い歴史を徹底して研究するために、合同機械工組合を取上げたが、組合書記長ウィリアム・アランは一切の記録類を彼に提供し、全面的に協力した。ブレンターノはここから、労働組合発展の三段階を見出し、1870年現在を第三段階に位置付けた。

「第三の段階は1824年の団結禁止法の撤廃とともに始まる。……労働組合は公共的な団体に発展し、それは労働者階級の繁栄のためにもはや抑圧されることのない組織になっている。それは労

働者階級の道徳的、知的および政治的教育のための最重要な手段となる。まさしくそれはストライキの頻発を抑えるための、またさらにはストライキの無秩序性を取り除くための最も効果的な要因であることを示している」(邦訳164ページ)。

労働組合員が非組合員に暴行を働いた事件を契機に、労働組合活動に新たな罰則を科すか、あるいはそれを合法化するかを判断するために、1867年2月、「労働組合調査王立委員会」が設置された。労働組合側は、上記の合同機械工組合書記長アランや、合同大工指物師組合書記アッブルガースなど、穏健で共済活動をよくし、ストライキをなるべく避ける方針の組合役員に、積極的に証言させた。「暴行を働いたり、ストライキをよくやるのは地方の小組合であり、組合が大規模になるほど、雇用主側はよく組合の話を聞くようになり、組合も損害の大きなストライキを慎むようになる」と。

この労働組合側の戦術は成功し、王立委員会は1869年、概ね組合活動に有利な報告書を出すのだが、自由党政府はなかなかそれを具体化する法案を出そうとしなかった。そしてついに1871年、『労働組合法案』が出てきたとき、それはアランたちが言うように労働組合がストライキや産業拘束をしない限りで合法化するが、それをした場合は刑法に問うというものだった。労働組合活動を刑事罰から解放するためには、1875年の保守党による法律が必要であった。労働組合は、ブレンターノが期待したようには容易に体制内化しなかったようである。

# 蔵書の始末

文＝ 浜 忠 雄

(はま ただお／人文学部教授)

3年前に還暦を迎えた頃から頭を悩ませている問題がある。それは蔵書の始末。生物学的にも研究者としても、そろそろ寿命が見え始めたせいもあるけれど、なによりも、一人娘に「この本、どうするの？ 私、知らないわよ」と言い渡されたのがキッカケだった。私がフランス革命や奴隷制度やハイチ史などを研究していることは分かっているようだが、そんなことにはさっぱり興味がなく、拙著『カリブからの問い』を手にして、「お父さんはカリブから何かを問われているんだ。大変ねえ」、「昨日寝床で読んだけど、とてもいい本だった。睡眠薬として最高！」と茶化すことしか知らぬ娘にとっては、私がせっせと買う本は始末の悪いゴミも同然なのである。

特段に蔵書家ではないから高が知れているとはいえ、研究室のほか自宅の書庫と書斎と居間とに分けて置かれた本の数はやはり相当なものである。和書はともかくとしても、気になるのはハイチ史やフランス植民地主義史に関する洋書である。その数およそ670冊。なかには、おそらく日本では私しか持っていないと思われるものや貴重な古書もあり、ハイチ史に関わる一つのコレクションになっていると自負している。

始末の方法はいくつか考えられる。一つは大学の図書館に寄贈すること。しかし、最近は何の大学も引き取りたがらないので、おそらく無理。二つ目は古書店に持ち込むこと。しかし、せっかく大系的にそろえた本が散逸してしまう難点があるために躊躇する。

三つ目の、もっとも有益な方法はハイチ史を志す若い研究者を見つけることである。そういう人には全部を無償で譲るつもりだ。最近ハイチ史にも関心が高まってきていて、私の本に挙げた参考文献を手がかりに、他大学の学生や院生から借用の依頼が来ることがある。私は求めがあれば未知の人にも貸すことにしている。だが残念ながら、ハイチ史研

究の有力な「後継者」の目途がっていない。

そんな折、目にしたのが今年（2006年）7月18日付『毎日新聞』の「福島県矢祭町、新設図書館の本、寄贈呼び掛け」の記事である。矢祭町は人口7千人余の小さな町。これまで図書館はなかったが、2005年度の町民アンケートで最も要望が多かったのが図書館建設だった。そこで1億2500万円で柔剣道場を改築して図書館にすることになった。だが、新たに図書を購入する財源はない。そこで、眠っている蔵書の寄贈を全国に呼びかけることになった。電話で問い合わせたところ、「送料は寄贈者の負担だが、8月中旬までのわずか1カ月間に全国各地から寄せられた本は10万冊を超えた」とのこと。実にユニークで有意義な事業だと思う。それで、和書は不要になったものから順にここに寄贈することに決めた。ただ、洋書はやはり二の足を踏む。「本の種類は問わない」が、「廃棄せざるを得ないものは廃棄する」とのことだからである。

そもそも、これらの洋書を大学の研究費で購入できていれば、こういう悩みは生まれなかったはずである。だが、研究費はゼミナールや卒業研究に役立つ本のほか消耗品に費やされた。そのために、専門研究のための洋書のほとんどは私費購入となったのである。

そこで思いついたのが「私蔵書を収容する国立図書館」の設立である。フランス革命の時代には教会や亡命貴族の財産が没収されて国の財産となり、そのなかにはおびただしい数の図書も含まれていた。それらが現在のビブリオテーク・ナショナルにつながるのである。私が言う「私蔵書を収容する国立図書館」はあくまでも提供者の自発的な意思によるものである。矢祭町が進める「もったいない運動」の精神に倣い、あわせて「知の遺産」を継承するためののだが、どうだろうか。

# 耳による読書

文=平田洋子

(ひらた ようこ/工学部助教授)

小説やドキュメンタリーなどの朗読が収録されたカセットテープやCDはアメリカでオーディオブックと呼ばれる。最近では、ネット上の書店や図書館から本を借り出す要領でダウンロードすることが可能なものも豊富にある。オーディオブックはアメリカの一般家庭に既に広く普及し、書店では、子供向けの物語からビジネス専門書や自己啓発本に至るまで幅広いジャンルのものが販売されている。日本と同様にiPodやMP3 Playerなどの携帯型デジタルオーディオプレーヤーを身に付けて歩いている人をよく見かけるが、それらの中には、音楽ではなくオーディオブックを聴いている人も多い。このような聴くための本が多く売れるようになった理由には、自宅や職場などで本を開く手間をかけずに、手軽に音声によって多くの情報を手に入れたいとする人がいるという背景がある。また、旅行や通勤などの移動時間を無駄なく使いたいとするニーズにも合致している。さらに、文字よりも音声による言葉の理解を得意とする人たちにも読書の楽しみを知ってもらえるというメリットも後押しした結果である。

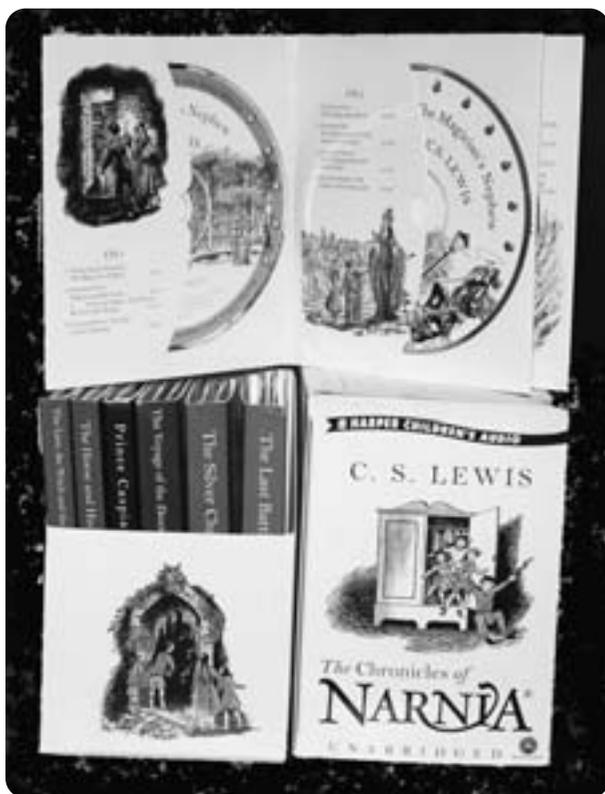
オーディオブックは、本や雑誌に目を通す時間のない場合や他の作業をしながら「耳による読書」をする場合に優れているが、アメリカの教育現場でもその有効性が認められている。文字ではなく音声による読書に慣れることによって、活字離れになると危惧する声はあまりないそうである。むしろ、感情豊かな朗読を聴くことによってその著者や本の内容に親しみを覚え、本好きの子供を増やすと考える人

も多い。また短時間に多くの音声情報を繰り返して効率的に取得できることによって、学習者の語彙力を高め、想像力を豊かにすることが期待されるため、総合的なコミュニケーション能力を高めるツールとしても評価されている。

先日、かつて和訳本で読んだことがある「ナルニア国物語」のオーディオブックを購入してみた。CDの枚数が多いため1枚ずつ再生する手間はあるものの(といっても1枚に1時間ほどの音声が入っているが)、パソコンで再生すると美しいカラーの挿絵ページがあり、本を読んでいるのとはまた別の楽しみ方ができる。また、朗読を聴くとその語りに惹かれ、文字を読むのとはまた違ったイメージを思い描いている不思議な感覚になれるのも面白い。

最近、我が国でもオーディオブックの普及が進んでいるというが、街中の書店ではたくさん扱っているところはまだ少ない。溢れんばかりの情報を様々な形で手に入れることが当たり前になりつつある今日、出版物よりも高額ではあるものの恐らくその種類や数は徐々に増していくと予想される。果たしてオ

ーディオブックがアメリカのように普及するのかわくは疑問ではあるが、アメリカの現状と同様に、少なくとも活字による読書が朗読を聴くことに取って代わることはないと考えられる。むしろ、耳から入る情報よりも目から入る情報に専ら頼っている我々の日常生活をもう一度見直して、本の楽しさを改めて知ることができるきっかけを与えてくれるものになれば良いのではないかと考えている。



# 図書館利用は 大学生活の一部



文=韓永學  
(はん よんはく/法学部講師)

大学時代、大学図書館は私の大切な居場所だった。下宿にはルームメイトがいてお互いに生活リズムが違うこともあり、私は朝食・夕食と就寝時間以外は下宿から目と鼻の先の大学に行って、大学図書館で過ごすことが多かった。大学図書館はソウル市内の一部が一望できる見晴らしのよい高台にあり、魅力的だった。館内の私の居場所は、新聞閲読やレポートのための資料を収集するとき以外は、大抵一般閲覧室だった。一般閲覧室は静かで、就職勉強や資格勉強をする3、4年生に人気があった。私は1年生の後期頃から一般閲覧室の一室に潜り、専門や副専門の勉強をはじめ読みたい本を読みあさった。

私がいた一般閲覧室は朝5時から入室できたが、中には24時間開放する一般閲覧室もあった。毎日図書館に通うにつれ、自分の好きな席ができ、朝食前に席取りを済ますほどだった。私のような生活サイクルを持つ学生は少なくなかった。一般閲覧室は朝9時頃になるとほとんど満席になるが、書架は昼間でも少し余裕があった。しかし試験期間になると、一時的に開館が早まる書架も席取り合戦が熾烈で、図書館入口まで100M以上の列ができることも珍しくなかった。そこで、遠いところから通う学生は友達に席取りを頼んだり、24時間開放の一般閲覧室の場合、数日間も排他的に席を独占したりするケースもあり、図書館利用に苦情が尽きなかった。そうしたなか、講義やサークル活動などで一定時間席を空ける際には、時間を示し人に譲ったりする自主的なルールができ、より多くの学生の合理的な図書館利用を目指すようになった。

以上の経験は10数年前の韓国の大学の「図書館文化」の一断面だが、最近も変わらないという。その後、私が日本に留学に来て感じたのは、日本の大学図書館は、比較的閑散としていて活気がないということだ。本学の場合も例外ではない。本学の図書館は、学生数を勘案すると、図書の閲覧や勉強のでき

るスペースが広くない。しかし毎日のように図書館を利用する学生は少ないようで、空席が目立つ。

大学図書館は、大学の設立目的を達成するための重要な施設として、大学構成員の学習や研究のための情報と資料を提供する。すなわち、大学図書館は、目まぐるしく変化する社会環境に対応しつつ、古今東西の必要な知識と情報を的確に収集、整理、保管し、大学構成員のニーズに応える機能を果たす。それゆえ、大学図書館は大学の象徴であり、その大学の水準を図る一要素でもある。大学図書館に対する評価においては、所蔵図書・資料の充実と利用の利便性だけではなく、実質の利用と価値生産の程度も軽視できない。

私は1年生を対象とする「基礎演習」科目で、毎年1学期の早い時期に本学図書館の見学プログラムを利用し、図書館職員の案内を基に、受講生に図書館の重要性と利用方法の周知を図っている。しかし、2学期になっても図書館と無縁な生活を送っている受講生が中にはいる。もちろん大学生が勉強、読書、思索できる場所は大学図書館ばかりではないが、学生のいない大学図書館はその存在意義を失う。本学の学生には、席取り合戦までいなくても、知識や情報の宝庫である大学図書館を積極的に活用する習慣を身に付けてほしい。積極的に活用しないと、本学図書館の問題や図書の補強が必要な分野も把握できず、教職員主導の図書館になってしまう。

本学図書館1階には新聞閲覧室がある。わりと地元紙から全国紙まで揃っており、一定の過去の記事も読める。大学生として求められる素養を養う上で、あらゆる部門の内外の主要動向を知ることは欠かせない。新聞はその通路の一つだ。普段新聞に接しない学生もいるようだが、自宅で新聞を購読していない学生は大学図書館の新聞閲覧室を利用してほしい。新聞や雑誌を読むところからでも、大学図書館を利用する学生の増加を期待する。

# この視聴覚資料がすごい！

## 視聴覚資料貸出ランキング

すでに多くの方がご存知のことと思いますが、およそ80万冊に及ぶ本学図書館の所蔵資料の中には、豊富なタイトルの視聴覚資料（DVD・ビデオ・CD等）が含まれています。これら視聴覚資料は、本館・工学部図書室それぞれに設置されているAVブースにて利用することができます（館外への貸出は行っていません）。教材用の資料から最近の映画DVDまで取り揃う本学図書館の視聴覚資料は、調べものの参考資料として、あるいは授業の空き時間の有効活用手段として最適です。

さて、そんな視聴覚資料をより多くの方に利用していただけるよう、具体的な利用方法や所蔵資料の一部などをご紹介します。

### AVブース利用方法について

#### 利用時間

（本館）

月～土→9：00～21：45

（工学部図書室）

月～金→9：00～19：45

土→9：00～14：45

◆必ず、サービス・カウンターで手続きを取ってください。

◆館内にある視聴覚資料の利用に限ります。

◆1度に利用できるAV資料は最大3本（枚）とします。

◆利用時間は原則2時間以内（2時間を超す場合は終了時点まで）です。ただし、他に利用者がいない場合、延長することができます。

◆延長を希望する際は再度の利用手続きを取ってください。

☆HPから、AVブースの設置場所が確認できます。（施設案内）

<http://library.hokkai-s-u.ac.jp/cgi-bin/tosyokan/index.cgi>

### 視聴覚資料貸出ランキング

TOP30【2006年4月1日～2006年9月30日】

こんな資料が人気です！！

#### 【TOP10総評】

第1位はダントツで「ハウルの動く城」です。視聴覚資料は基本的に一点ずつの所蔵となっています



ので、運悪く貸出を受けることができなかった場合は、原作「魔法使いハウルと火の悪魔」を読みながら機を窺うのが得策でしょう。

第2位の「宇宙戦争」、第3位の「コンスタンティン」には、それぞれトム・クルーズ、キアヌ・リーブスという、日本で一、二の人気を争う（？）俳優が出演していることから、まずまず想定内のランキンと言えます。



順位	タイトル	貸出回数
1位	ハウルの動く城	118回
2位	宇宙戦争	63回
3位	コンスタンティン	61回
4位	最後の恋のはじめ方	57回
	マダガスカル	57回
6位	ステルス	53回
7位	ロボッツ	50回
8位	ハイドアンドシーク:暗闇のかくれんぼ	47回
9位	パイレーツ・オブ・カリビアン:呪われた海賊たち	46回
	星になった少年:shining boy & little Randy	46回
11位	ターミナル	42回
12位	銀のエンゼル	39回
13位	マイケル・ジョーダン:トゥ・ザ・マックス	38回
	笑の大学	38回
15位	シンデレラマン	37回
16位	バットマン ビギンズ	35回
	ミリオンダラー・ベイビー	35回
18位	スクール・オブ・ロック	29回
	姑獲鳥の夏	29回
	死ぬまでにしたい10のこと	29回
21位	オペラ座の怪人	28回
22位	スター・ウォーズ エピソード3/シスの復讐	27回
23位	TAXi	25回
	バトル・ロワイアル	25回
25位	イン・ザ・プール	24回
26位	ハリー・ポッターとアズカバンの囚人	23回
	猟奇的な彼女	23回
28位	アルマゲドン	21回
	マイ・ボディガード	21回
	ミッション・インポッシブル	21回

※本館所蔵分対象

第4位にランクインした「最後の恋のはじめ方」などのラブ・ストーリーもの、あるいは、同位の「マダガスカル」、第7位の「ロボット」などのディズニー・アニメは、女性からの支持が比較的高いようです。



逆に、男性からの支持が高いのは第6位の「ステルス」。「史上最強の戦闘機」、「エア・バトル」、監督の「ロブ・コーエン」など、なるほどオトコ受けしそうな要素が満載です。

第8位の「ハイド アンド シーク：暗闇のかくれんぼ」はサスペンス/スリラー系作品として唯一のTOP10入り。名優ロバート・デ・ニーロと天才子役ダコタ・ファニングの豪華共演作ですが、公開時はそれほど話題にも上らなかった作品だっただけに、意外といえは意外な結果です。



第9位の「パイレーツ・オブ・カリビアン：呪われた海賊たち」は根強い人気を誇る作品です。続編となる「パイレーツ・オブ・カリビアン：デッドマンズ・チェスト」も公開されたことから、この人気はしばらく続くことでしょう。

注目すべきは同位の「星になった少年」です。カンヌ国際映画祭男優賞を獲得した柳楽優弥主演の本作は、同賞受賞作「誰も知らない」を抑え、さらには日本映画唯一となるTOP10入りを成し遂げました。日本映画について言えば、青春を謳歌する若者たちの起爆剤ともいべき「青春デンデケデケデケ」、「スウィング・ガールズ」などを始め、優れた作品が数多く取り揃っていることをPRしておきます。



#### 【少レクセのある】おすすめ視聴覚資料

惜しくもTOP30入りを逃したもののなかから、おすすめの資料を紹介します。

### 「ピンポン」

熱い！！卓球に限らず、体育会系の部活にはありそうなこのお話。豪華な出演者たちのおかげで、高

校の卓球部という設定を忘れてしまいそうになりますが、そこはご愛嬌。観た後には友達と卓球したくなること間違いなしの、爽快感いっぱい作品です。

…脇役出演の荒川良々さん…最高です。特典Discの短篇も見逃すなっ！！…



### 「snatch」

ブラピもデル・トロも主演じゃない！？なのにカッコイイこの作品。この2人に負けず劣らず主演(のはずの) ジェイソン・ステイサムが良い味を出しております。話の流れは多少いりくんではいますが、個性豊かな俳優達のおかげで物語にどんどん引き込まれていきます。セリフの英語にとっても訛りがあるので、英語に自信のある人は、字幕無しで挑戦してみても面白い作品です。



### 「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」

この作品は、キューバのミュージシャン達の音楽を、彼らの人生とともに収めたドキュメンタリーです。“黄金の声”を持つ男、イブライム・フェレールをはじめ、キューバ音楽界の重鎮達のライブ映像も満載していて、見ごたえ&聴きごたえたっぷりです。たまには、遠い異国のメロディーに耳を向けてみるのもいかがでしょうか。地球上で一番セクシーな音楽がそこにあるかもしれません。



### 「サタデー・ナイト・ライブ ベスト・オブ・マイク・マイヤーズ」

加トちゃんケンちゃんごきげんテレビのアメリカ版！？…誰か、見てみないですか？…



# 24時間オープン図書館!?

文＝青木千加子

(あおき ちかこ／経営学部講師)

コンビニやファミレスなど、24時間利用できる店は当たり前のようになっています。最近では、24時間まんが喫茶というのも登場し始めているようです。しかし、24時間開館図書館というのは日本では存在していないでしょう。ところが、アメリカには24時間開館している大学図書館が数多くあるのです。私が修士課程を過ごした大学の図書館もその一つでした。学期中の平日は24時間、週末でも深夜12時まで利用が可能でした。日中、学生のほとんどは図書館を利用していますが、深夜でもかなり多くの利用者がおり、試験期間ともなると、さらに利用者の数は増えていました。

この大学図書館の24時間開館の事例は、図書館というだけにとどまらず、日本と米国の大学の違いを顕著に表しているように思えます。一般に卒業が難しいと言われる米国では、多くのdropout(落第者)が出て、その数は平均25%以上と言われています。落第しないために、学生は必死に勉強し、学期が始まれば、図書館で過ごす時間がとても多くなります。もちろん、勉強は深夜まで続きます。

深夜になると、「Night Owl」という名前の警備員が図書館の前から学生の寮やアパートの近くまで送ってくれます。アメリカではキャンパスが広いので、夜間キャンパス内で殺人や暴行事件が起きることもあるので、大学もこのようなサービスを行っているわけです。

アメリカの大学は勉強が大変だから、アルバイトをしている学生は少ないと言われるますが、そんなことはありません。日本の大学生と同じように、多くの学生がアルバイトをしています。アメリカの大学では学生が学内で働ける場所が多く、図書館はもちろんのこと、カフェテリア、売店、駐車場、コンピュータールーム、インフォメーションセンター、そして学部受付なども学生アルバイトが行っています。時給は安くても、学内のアルバイトは授業時間に合わせたシフトが組めるので、学生にとってはとてもメリットがあるわけです。

す。図書館では深夜になると正職員のlibrarian(図書館員)は帰宅しますから、それに替わって学生アルバイトが登場します。

アメリカの大学では1部、2部の区別がなく、午前9時から午後9時半まで開講している授業は、一般学生、社会人学生の区別なく受講することができます。つまり、自分のライフスタイルに合わせてクラスを受講できるわけです。私のクラスメートにはgraveyard(墓場ではなく、夜間勤務)シフトで働き、早朝に図書館で勉強をして、昼間は寝て、夜間の授業を受け、また深夜勤務に戻るという学生もいたほどです。

試験期間になると、どこの大学でも見られるように、図書館のコピー機の前には長蛇の列ができます。しかし、友達の講義ノートのコピーしているわけではありません。アメリカの大学では学部生、院生問わず、試験期間には多くの課題が課せられます。学部生ではA4サイズで6枚、院生では10枚以上の小論文を書かなければいけないクラスもあります。小論文をクリアするためにも、多くの文献を読む必要があり、課題が決まると、学生は一目散に必要な文献のコピーを取りに図書館を目指します。コピー機の前には長蛇の列ができるのは、このためなのです。

深夜ともなると、さすがにコピー室もすいています。ところが、コピー機の前に散乱した本が書棚に戻され、整理整頓されるのは早朝です。そのため、深夜に図書館を利用する時、各フロアのコピー機の前に散乱している本の山から必要文献を探し出すのは一苦労でした。

24時間営業先進国のアメリカでは、コンビニ、スーパー、レストランはもちろんのこと、チェーン薬局なども24時間営業を行っており、大学図書館の24時間オープンも珍しくなくなっています。そのうち、大学自体が24時間オープンとなり、深夜開講授業!なんてものが登場したりするかもしれませんね。

## 図書館からのお知らせ (学生のみなさまへ)

10月11日より、図書館では、コンピュータの利用に際し、全学的なネットワークの観点から、認証制を導入しました。このことに伴い、今後、認証用のIDとPW(パスワード)をお持ちでない方は、PCブースを利用できませんのでご了承ください。なお、IDとPWの交付手続きについては、5号館3階の電子計算機実習室でお尋ねください。



## 編集後記

みなさんこんにちは、ビッグフットです。気温もだいぶ下がりがり、木々も紅葉してきている今日この頃、いかがお過ごしでしょう。秋といえば、ほとんどの人が読書やスポーツ、おいしい食べ物、といったものを思い浮かべますよね。さて、そんな秋ですが、ビッグフットの2006年秋のテーマは、う～ん、やはり「食べる」です。年中そうかもしれませんが、大切なことですよ、やっぱり。そこで今年は…体重計も封印して、準備万端、まだ見ぬキノコ王国へ出発だー!というわけで、みなさんも秋を満喫してくださいねー。

…そういえば、「去年ルノアールで」914.6/SEKは読みましたか?…

北海学園大学附属図書館報 図書館だより 第28巻3号 (通巻179号)

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号  
TEL (011)841-1161 (本館内線) 2273・2274・2275 (工学部内線) 7813・7814 印刷所: (株) アイワード